

知の世界の生き方あこがれ

青春の本棚

三四郎

夏目 漱石

故郷の熊本から東京帝大に進学するため上京した三四郎の前に、三つの世界が広がる。第一は熊本の田舎、第二は金と無縁の研究者がすむ知の世界、第三はセレブの華やかな世界。中学生で夏目漱石のこの本と出合ってから、研究生生活を送る野々宮君や、高校の英語教師広田先生のように「第二の世界」の学者の生き方にあこがれた。

大学で仏教美術史を教える父の背中を見て「自分の進む道は『第二の世界』だと思い、迷ったことはない」とほほ笑む。「三四郎入学」から半世紀後に東大の門をくぐった。町並みにもまだ三四郎のころの面影が残り、何より大学に知の世界が歴然としてあった。

だが「今、大学は大きく変わった」と批判。「知の尊厳を保つのが大学のあるべき姿」と力を込める。学生には「一生懸命本を読んで、大学をはじめ学校でしか学べないことを学んでほしい」と激励する。



滋賀大学長

佐和 隆光さん

さわ・たかみつ 和歌山県高野山生まれ。東大経済学博士。京大経済研究所所長などを経て2010年4月から現職。67歳。